



京の伝統野菜
研究家
田中 大三
たなか だいぞう

キュウリは果形の長短、イボの色・数・大きさ、雌花の付き方、側枝の発生など特性の異なる品種が数多くあるので、作型や用途に応じた品種を選びましょう。

直売所などでは、主流のときわ系品種に加え、イボが多くやや長めの四葉系や果実が緑と白の半白系、味や歯切れ、漬物に適する品種なども取り入れると品ぞろえが増しておもしろいです。

土壤伝染性病害を防ぎ、草勢を強健

にするためカボチャ台木に接ぎ木します。ブルームレス台木は、果実表面の粉(ブルーム)の発生を抑え、てりを際立たせます。

キュウリは、べと病、うどんこ病、炭そ病などの糸状菌による病害やウイルス病に悩まされます。中でもうどんこ病は薬剤抵抗性があるため大変困りものです。幸い各種病害に耐病性をもつ品種も開発され、薬剤防除の回数を少なくすることができます。

着果が始まれば、追肥・灌水で養水

分を切らさないようにします。土壌表面にわらや敷草を厚めに敷くと地温上昇を抑え、土壌水分を保つので、特に露地夏秋栽培で有効です。

日々こまめに病葉や古葉を摘葉し、日照、通風を心掛け、側枝は着果節位の一つ先で摘芯するのが基本です。ただし、これらの作業を一気にするとリズムを乱し、曲がり果発生につながるので注意しましょう。曲がり果を見つけたら、早い段階で摘果して草勢低下を防ぎます。

4～5節目から出た元気のよい子づるを伸ばし、主づる2本仕立てにする最盛期のピークをなだらかにできる効果がある。その場合は株間を75cmぐらいにする。

追肥 収穫が始まれば10日～2週間ごとに、敷きわらをかき分けて化成肥料を施す。

灌水 敷きわら(マルチ)の下が常に湿っている状態にする。

不良果の発生は水分不足、草勢低下で起きやすい。

尻細果 くびれ果

梅雨前に敷きわらか敷き草を厚く敷く

株間60cm

畝幅2.5～3m

2本仕立て



↑四葉系キュウリの「シャキット」は病気に強く歯切れが良い。

京野菜紀行

聖護院キュウリ



← 聖護院キュウリ。

江戸時代から明治初期にかけて、聖護院地区で栽培されました。その改良種が昭和30年ごろまで一乗寺地区で早熟栽培され、品種が維持されています。

果長25cm前後で、果色は緑色。黄色い小さい星が線状に入り、尾部はやや黄緑がかり黄線が目立ちます。中間部の断面は角の丸い三角形と言ったところ。ほかの品種にある肩部の苦みは、この品種にはなく、香気が高く歯切れが良いのが特長です。もろきゅう、

きゅうりもみ、ぬか漬けなどでキュウリ本来の味わいを楽しめます。

栽培して感じるのは、側枝の発生が多く、よく伸びること。誘引ネット全体に込み合わない程度につるを配置してください。親づると4～5節目から出る元気のよい子づるを1本伸ばし、主づる2本仕立てにすると、収穫ピークを平坦にする効果があります。また、耐病性品種ではないので、主要病害に対する防除が必要です。